

広島大学総合科学部報



1986年3月22日

No. 30



特集：総科. 新たなる発展

広島大学総合科学部広報委員会

## 目 次

1. 特集 総科・新たなる発展			
1)	新しい大学院研究科について	総合科学部長 岡本 哲彦	1
2)	新設 外国語コース	外国語コース英語講座教授 稲田 勝彦	2
3)	外国語コース教官インタビュー	編 集 部	
	学際的知識と語学	藤本 黎時教授 (英語講座)	4
	「学ぶ」プロセスに立つ	嶋屋 節子教授 (ドイツ語講座)	5
	「選択」と「総科」の間に	内藤 陽哉教授 (フランス語講座)	6
	語学だけでなく、文化・歴史も学べ	檜山 久雄教授 (中国語講座)	7
	「語学バカ」じゃいかん	米重 文樹助教授 (ロシア語講座)	8
4)	新発足の社会科学部研究科 (博士課程)		
	—新しいコスモロジーの工房—	社会文化コース教授 山田 浩	9
5)	インタビュー 社会科学部研究科—地域研究について—		
	ヨーロッパ研究 佐竹 明教授に聞く	編 集 部	11
6)	2年目を迎える生物圏科学研究科	編 集 部	12
7)	大学院工学研究科情報工学専攻の新設・発足について	編 集 部	13
8)	女子学生 — 総科のひとつの体現	編 集 部	14
9)	学生による総科のビジョン		
	ある総科生のつぶやき	社会文化コース3年 牧下 圭貴	16
	総合科学部現代事情	環境科学コース3年 中谷 健二	17
10)	取材を終えて…	編 集 部	19
2. 就職委員会だより		委員長 大内 侃	20
	極私的マスコミ志望論	地域文化コース4年 大牟田 聡	22
	「ハウ・ツウ・マスコミ」	社会文化コース4年 H・H生	23
3.	シリーズ「数字」その6	編 集 部	25
4.	シリーズ「海外」		
	マーシャルで出会った人々	社会文化コース助教授 清水 昭俊	26
	ナイロビでの学生生活雑感	地域文化コース3年 古川 哲史	28
5.	特別研究論文題目紹介		30
6.	学部の記録		35
7.	退官教官紹介		36
8.	'86総科カレンダー	編 集 部	37
	『飛翔』委員大募集!!		24

イラスト・金物屋

表 紙・編集部

# 1. 特集 総科・新たなる発展

編集 部

総合科学部は来春、第10期生を送り出すまでになった。設立以後、常に模索を続けてきたが、特に今年には既存の4コースに新しく外国語コースが加わり、大学院では生物圏科学研究科に加えて、社会科学研究科と情報工学専攻が発足することになった。この動きは総合科学部の発展過程が新たなるラウンドに入ったことを示しており、今後の発展に大きな影響を与えるものとして注目されるものであろう。編集部ではこれらの新たなる発展への動きを取材し、特集を組んでみた。新しくできるコース・大学院を中心にまとめたが、学生の声を加えることで現在の総科及びこれからの総科の姿が少しでも浮び上がればと考えている。

## 1) 新しい大学院研究科について

総合科学部長 岡本 哲彦



総合科学部が創立されて11年が過ぎた。我が学部は創立当時から、全学の協力のもとに新しい大学院構想を創立する事が約束され、また我々はこれに向かって努力して来た。その間に国際経済は激動し、ボックス・アメリカナからボックス・

コンサルティスへと舞台は大きく回りつつある。この中で我が国はGNP一割国家にふさわしい国際的貢献を果たしていく事が求められてきている。他方においては21世紀に向けてアジア新興工業国群や西太平洋途上国の台頭があげられ、太平洋時代の到来も考えられ国際経済秩序の再構築が求められている。一方、産業社会はエネルギーを核とした巨大科学技術、新素材の開発、エレクトロニクス、バイオテクノロジーといった未踏革新技術に取り組んで来ている。広島大学はこれらの社会情勢をふまえて、新しい大学院構想のもとに生物圏科学研究科を60年度に創設、61年度には社会科学研究科および工学研究科に情報工学専攻の博士課程が新設されることになっている。これらの研究科のうち総合科学部を主とした専攻について目標および概要を記して、諸君の今後の学問設計に役立てたいと思う。

### [1] 生物圏科学研究科

人間を中心とした生物が生存する場である生物圏における環境と資源の保全・管理・開発を目指す学際的な高度な技術者・研究者を養成するものである。

研究科は環境計画科学専攻、生物機能科学専攻および生物生産学専攻の三専攻からなっている。総合科学部の教官は主として前者の2専攻に属している。

#### (1) 環境計画科学専攻

本専攻は社会環境、自然環境、環境開発技術の3分野からなっている。

(a) 社会環境分野は自然環境と調和のとれた人間社会環境の構築を目指して教育・研究を行う。

(b) 自然環境分野は生物と水圏、気圏、地圏との関連を静的かつ動的にとらえ、調和のとれた生態系の維持発展を目指す。

(c) 環境開発技術分野は、自然環境の構造と機能、開発についての計測技術の改良、更に人間の生活環境の改善のための新技術・新材料物質の開発を目指す。

#### (2) 生物機能科学専攻

本専攻は生体分子機能、生体高次機能、植物生産機能の3分野からなり、総合科学教官は主として前2分野に属している。

(a) 生体分子機能分野は生体分子の構造と機能を研究し、生体分子の機能の開発と利用をはかる。

(b) 生体高次機能分野は細胞および組織の構造と機能の内的、外敵要因を究明し、環境と調和した生体機能の維持、有効利用を計る。

### [2] 社会科学研究科

本研究科は法学部、経済学部、総合科学部を基礎として設立されるもので、伝統的社会科学の成果をふまえた上で新しい社会現象に対応し、現代社会の要請にも応えうる斬新かつ学際的な学問領域を開拓するものである。本研究科は法律学専攻、経済学専

攻および国際社会論専攻の3専攻よりなっている。総合科学部の教官は法律学、経済学専攻に数名ずつは属してはいるが、大部分は国際社会論専攻に属している。紙面の都合上此の専攻のみについて述べる。

(a)国際関係分野は、今日の国際問題を政治・経済的分析の枠組みの中で多角的にとらえ、それらの相互依存関係およびそれらが各国の国内構造に及ぼす影響を解明し、今後あるべき国際関係の姿を模索する。

(b)比較と社会分野は、社会構造、政治形態、宗教、思想等の視点を定めて、それらを比較考察し、世界の諸地域において生起している広範な社会的諸事象を相互に比較することによって、それらの共通性と個々の特徴とを明らかにすることを目指す。このことにより国際社会における協力の緊密化の可能性を探る。

(c)地域社会分野は、各地域社会ごとに、政治、経済、社会、文化等の視点を定めて、その実態と歴史的背景とを明らかにし、国際社会を構成する各地域社会の内的構造を解明し、国際社会を動かす基本的要因を探り、当該地域の社会事象を相対的に把握する。

総合科学部の学生は自分の学問分野によっては、

上記3専攻のいずれにも属する事が出来るのは勿論の事である。

### [3] 情報工学専攻

本専攻は総合科学部および工学部の教官より構成されており、基本的には工学研究科に属するが、総合科学部に属している教官を指導教官とする学生は主として総合科学部で教育・研究を受ける事になる。

この専攻は情報の理論と応用に関する研究開発ならびに人材養成を行う事を目的とするものであり、具体的には次の3つの分野について特色ある教育・研究を行う。

(a)情報ないしは計算工学の分野における基礎理論ならびに数理統計学に重点をおいた教育・研究を行う。

(b)人間行動における諸要因を十分に配慮したマンマシンインタフェースを備えたシステム形成のための発想と斬新技術展開ができるような「情報システム」の分野における教育・研究を行う。

(c)社会の急速な情報化志向に適切に整合させた有効処理のための学術、技術的寄与に重点をおいて教育・研究を行う。

## 2) 新設 外国語コース

今春より、総合科学部に新たに「外国語コース」が開設されました。これによって総合科学部は、地域文化、社会文化、情報行動科学、環境科学および外国語の5つのコースを擁することになり、体育学部創設という問題を除けば、学部創設時の目標がほぼ達成されたということになります。この記念すべき年に入学された61年度生のために、ここに外国語コースの目的・内容を述べ、新コース選択の指針に供したいと思います。

### 〈外国語コースの目的〉

外国語コースの目的は大きく分けて3つあります。その第1は、言うまでもなく、急速な国際化に対応するために、外国語の多角的、体系的学習によって高度な語学力を修得し、外国の言語と文化についても幅広い学際的知識を修得した国際性豊かな人材を育成することです。

その第2は、総合科学部全コースの学生の語学力

外国語コース英語講座教授 稲田 勝彦  
を更に強化することであり、第3は、広島大学全学の外国語教育を改善することです。

以下、便宜上、目的の第3、第2の順で話を進めましょう。

### 〈全学の外国語教育改善〉

広島大学全体の外国語教育の改善をはかることは、外国語教育担当部局としての総合科学部の重大な使命です。これまで私たちは外国語教育に対する学内外からの要請に応えるべく努力を重ねてきましたが、外国語コース発足によって、全学の外国語教育が私たちの理想と考えるものにいっそう近づいたことを大変嬉しく思っております。では、外国語コースが置かれたことによって、全学の外国語教育（この中には総合科学部生が1・2年次に履修する外国語の教育も含まれます）はどのように改善されるのでしょうか。

第1に、学生が高いレベルの外国語を学習できる

機会が大幅にふえます。現在、全学的に、外国語は2つの外国語を1・2年次に「外国語Ⅰ・Ⅱ」という授業科目によって計12単位履修することになっており、それ以上学習する機会は事実上閉ざされています。私たちはこれが外国語教育、特に初修外国語の教育を形骸化する最大の要因であると考え、外国語修得に意欲と動機を持つ学生が4年次まで継続的体系的に外国語を学習できる途を開く必要があると考えました。そのために、外国語科目に「外国語Ⅲ・Ⅳ」という授業科目を設け、外国語コースに開設される演習科目の大部分をこれに振替えることによって、どの学部学生でも2ヵ国語以上を最大限32単位まで履修できるようにしました。

第2に、外国語コースの開設によって、外国語の授業の内容・方法が多様化されます。すなわち、全学部生必修の「外国語Ⅰ・Ⅱ」の授業を、たとえば会話、LL、作文、速読など目的別に多様化したり、100分単位の授業を50分ずつ分割し、前半と後半で授業内容、担当教官を変えたり、また、短期集中的に外国語を学ぶための「集中講座」を設けたりします。これらはいずれも実施には多大の困難を伴うものですが、外国語コース発足を契機にすでに実施されているものもあります。

#### 〈総合科学部生の語学力の強化〉

総合科学部は発足当初より、深く幅広い専門知識を備えると同時に、高度な語学力を身につけた国際性豊かな人材を育成することを目標としてきました。このため、総合科学部には他学部にはない専門教育科目の外国語科目への振替え、「外国語特別演習」の必修という制度があります。これが、外国語コース発足により、今後更に次のように充実されます。

1. 現在、すべてのコースにおいて、自コース以外の授業科目を12単位履修するよう定められていま

す。もしこの12単位すべてを外国語コースに開設された授業科目によって履修すれば、「外国語特演」「外国語科目」とあわせて、総合科学部生は外国語を32～28単位履修することになります。しかもその内容は、実務外国語、時事外国語、外国語論文作法などきわめて実用的価値の高いものです。どのコースの学生も外国語をいわば副専攻とすることができるわけです。(図1参照)

2. 外国語コース発足に伴って、「外国語特別演習」の授業科目が改正されました。今後は、「外国語特演」は外国語の四技能の強化にのみ限定されそれだけ外国語学習の効果があがると考えられます。

3. 先に「全学の外国語教育改善」で述べたこと、すなわち、「外国語Ⅲ・Ⅳ」の新設、授業内容・方法の多様化なども総合科学部生に適用されます。

このように、備えられた外国語修得の機会を最大限に利用することによって、総合科学部生は、各コースで得た専門の知識や技能に加えて堪能な外国語という強力な武器を振りかざし、それぞれが目指す世界にまっしぐらに飛び込んでゆくことができることでしょう。

#### 〈外国語コースの目的〉

外国語コース固有の目的についてはすでに述べました。外国語コースでは何をどのように勉強するのかを考える前に、外国語コースの卒業生に開かれていると思われる進路の楽しい予想をしてみましょう。皆さんも多分お読みになったと思いますが、総合科学部案内『無限への挑戦』には次のようなものがあげられています。

〈通訳専門職、翻訳家、ガイド、外務省職員、法務省出入国管理関係職員、地方自治体の国際交流課の職員、テレビ放送外信部、海外レポーター、海外特

(図1) 総合科学部生の外国語履修 (英語を第1外国語、ドイツ語を第2外国語とした場合)

セメ	1	2	3	4	5	6	7	8
第1外国語	英語Ⅰ (1)	英語Ⅰ (1)	英語Ⅰ (2)	英語Ⅱ (2)	英語Ⅲ (4)		英語Ⅳ (4)	
第2外国語	ドイツ語Ⅰ (3)	ドイツ語Ⅰ (3)	ドイツ語Ⅱ (2)		ドイツ語Ⅲ (4)		ドイツ語Ⅳ (4)	
専門振替			外書購読 (1)	外書購読 (1)				
外国語特演	英語会話Ⅰ (1)	英語会話Ⅰ (1)	英語会話Ⅱ (1)	英語会話Ⅱ (1)	英語会話Ⅲ (1)	英語会話Ⅲ (1)		
自由選択 他コース			(外国語コース) (4)		(外国語コース) (4)		(外国語コース) (4)	

派員、スチュワーデス、旅行会社、各種企業・商社などの海外駐在員・海外担当職員、コンピューター・情報機器製作、外国語教師、大学院進学)

外国語コースは単なる「外国語学科」のようなものでなく、いわば「国際外国語学部」ともいべき性格を持つものですが、これはひとえに、外国語コースが総合科学部の中に置かれているからに他なりません。外国語コースの学生は、外国語を主専攻とし、他の1コースをいわば副専攻とするという言いかたさえてできるでしょう。それゆえに、外国語コースの学生が履修すると予想されるパターンのひとつとして、『無限への挑戦』は次のようなものをあげています。

〈コンピューター関係をめざすC君の場合—「現代言語理論」「言語応用論」を基礎に、「情報学」「コンピュータープログラミング」、さらに高度な「情報処理」関係の講義(情報行動科学コース)を選択履修し、卒業論文としては、コンピューターを駆使して、「コンピューターによる語彙の分析」「コンピューター翻訳」といった外国語研究の新しい領域に踏み込むことも可能となります。この点でも総合科学部は従来の学部と異なり、極めて有利な条件に恵まれています〉

次に外国語コースに関して特記すべきことを幾つかあげてみましょう。

1. 外国語コースは次の3つの群に分かれ、学生は2年次になるといずれかの群を選択することになります。

I群 英語を主とするもの

II群 ドイツ語を主とするもの

III群 フランス語を主とするもの

さらに、英、独、仏、中、露語のうちから副とす

る外国語を選択します。

2. 外国語コースの受入れ可能な学生数は、61年度生の場合、10名です。希望者多数の場合は、1年次に履修した外国語関係の成績が考慮されるでしょう。

3. 外国語コース共通必修科目として「総合言語理論」「総合言語文化・芸術論」(2年次)があります。学生はこれによって将来の方針をたてます。

4. 外国語コースの特徴は、まず何よりもそのハードな演習科目にあります。まず必修単位として、「外国語特演」12単位(2ヵ国語)、選択必修科目の演習12単位、自由選択科目の演習約10単位、計34単位、それに外国語科目14単位以上が加わります。3年次後期の時間割はおそらく次のようなものになるでしょう。(図2)

この楽しい難行に挑戦する勇氣ある学生を、50名の外国語教官団は待っています。

(図2)

〈第1群、英語を主とするC君の3年次後期の時間割〉

土	金	木	水	火	月	
言語学 社会人類	論 言語思想	作法 英語論文 演習	論 言語応用	演習 実務英語	演習Ⅲ 英語会話	1. 2
	治経 経済研究	ア メリカ政	史 演習	論 演習	異文化 コミュニケーション 演習	3. 4
		(同 右)	(演習 情報 コース)	(同 右)	現法 演習Ⅱ 講義 (情報 コース)	5. 6
						7. 8

### 3) 外国語コース教官インタビュー

#### 編集 部

#### 学際的知識と語学

藤本 黎時教授(英語講座)

外国語コースで養成するのは、文学部の英米文学科のように狭い専門領域の学生、つまり文学と語学を中心に専攻する学生というんじゃないで、もっと広い範囲になると思います。従来の狭い講座じゃなくて、中心は語学の実力をつけるということで、何よりもまず、基礎としての外国語の知識と運用能力を身につけ、そしてその運用能力が現代の新しい国際

社会の中でも活用できる程度の、それはなかなか難しいかもしれないけど、少なくとも将来はそういうところを目指していく学際的知識の基礎のある学生を養成するというのがひとつですね。それと同時に、専門領域では、従来にない専門領域を語学と並行してやっていただくということが大きな特色だと思うんです。文学部の英米文学科であれば、英語という手段を使ってイギリスやアメリカの文学か語学を研究するし、教育学部であればそれに加えて英語

の教育法というのをやるのかもしれませんが、我々のところには既に他の4つのコースというものがありますし、我々のコースで開講する授業科目もあるから、学生が自分の希望でさまざまな授業科目を受講することが可能です。つまり学際的に授業科目を受講することができますね。ですから、従来ですと、例えばジャーナリストや特派員になってイギリスに行く、という人たちの場合は、法学部や経済学部から行く人もあれば、文学部の英文科から行く人もありますが、そういう人たちだと、英文科の人なら英語・英文学に偏るでしょうし、法経の人ならやはり自分たちの専門領域に偏るでしょう。ところが我々のところでは、そういう人たちにないようなところが、もっと出せるんじゃないか、と。英語の運用能力はもちろん、英語以外にももう一つ、ドイツ語、フランス語などの運用能力をつける。それも四技能、英語をただ読むだけでなく、読む書く話す聞くという4つの調和のとれた技能を養うことに重点を置きます。その上でさらに、学際的な、イギリス政治経済研究、現代国際政治論、平和学など、その辺りの授業を聴いて、学際的な知識を持ったジャーナリストが育てば、これは有用な働きができるんじゃないかと思えますがね。また現代のコンピューター化された社会では、翻訳機械のようなものまで出現していますね。そういうものは、工学部で情報機器を扱ってきた人たちが開発するでしょう。しかし従来の英文科の人たちでは、そういうところに加わっていくことはできないでしょうし、電算機を扱うこともできませんね。総合科学部ではその点、プログラミング通論が必修科目になっているし、情報行動の授業もあります。将来は、必要があればそれに加えて新しい授業科目を立ててもいいと思えます。つまり、語学が非常によく出来、あるいは語学をある程度専門的に、言語理論まで学んだ上で、情報工学も勉強して、自然言語解晰とか翻訳機械開発の領域に進む人たちも養成できるんじゃないかと。そういうのは、どこの学部のだこの学科が養成できるかという、今のところちょっとないでしょう。そういう現代社会の新しく生まれた学際的な領域に進む人たちが、これから育て欲しいと思うわけですね。ですから、外国語コースの第一群英語コースに来て、単に英語の言語理論とかそういうものだけを勉強するんじゃなくて、まんべんなくいろんな授業科目をとれますから、それによってその人の特色のある将来の方向を模索することができるんじゃないかということで

すね。

そういうことですから、外国語コースは当面定員10名位ですが、どういう学生に特に来てもらいたいということはないんです。卒業後の分野を考えても、あらゆる方面に出ていく人たちが養成されるわけですから、ひと口にどういうことに関心のある人、というのは言えないんですね。私なんかは英文科の狭い領域で育ってきた人間で、こういう者が教育せざるを得ないのが現状ですが、次の世代には、もっと幅広い専門分野を持った、しかも英語のできる人が後継者になってもらいたいですね。古い皮袋に新しい酒のたとえもありますから、皆さんには新しい皮袋になっていただいて、新しいものが醸造されてくるのを楽しみにしたいと思います。(談)

### 「学ぶ」プロセスに立つ

嶋谷節子教授(ドイツ語講座)

「ドイツ語」は外国語コースが目標としている新しい外国語教育の一環の中に位置づけられるわけですが、その教育目標には従来の文学部のドイツ語ドイツ文学科や外語大とことなってきた面が強く押し出されていると思います。文学はすばらしい文化遺産で、その価値は当然ひきつがれてゆかねばなりません。一つの文学作品の持っている価値を文芸の伝統の中で理解し、また語学的に解明する仕事は大切です。また、実用的な語学の運用能力も現代では欠かせません。これらの両面を生かす言語教育を、外国語コースは目指していると言えるでしょう。

では具体的にはどのような事が計画されているのか見ることにしましょう。第一には、現実のドイツを様々な角度から正確に把握することから出発します。西と東に分れたドイツという国の現状を考察してゆくとき、そこに必然的に私たち日本人が抱えている様々な問題と共通した点を見出せるはずですよ。

しかし、国際的にかかわり合っている身近な問題を見ていくとき、具体的な政治・経済・文化などの諸問題を処理してゆく態度の中に、ドイツには日本と違った点が多くあるわけです。そこではじめて何故ちがうのかという疑問が生れ、それを解き明かしたいという意欲が湧いてくると思うのです。現在から出発して文化的・歴史的背景を順次追って行きながら過去へ遡って行けば、問題点の中心を外れることなく自分の最も関心のある具体的研究テーマに辿りつくことができると思うのです。その具体的研究

テーマこそ、従来の文学部や外語大の枠を大きくこえている自由なものであっていいわけです。極端に言えば、学生一人一人が新しい研究テーマを探し出していいわけです。

そのような研究分野の広がりと共に、外国語コースに在籍している限り、十分な語学力をつける必要があります。以前は読むことが中心でしたから、文学的香りの高い作品を味わうことを語学力修得の主たる目的にしていたわけですが、現在の国際的社会では、現在に通じる言語能力が基礎になってはいけません。そのための演習では会話能力と共に様々な分野のテキスト類を読み分ける能力も訓練する必要があります。会話体と文章体の違いも、しっかりと自分の語感の中に体得していく必要があります。とは言っても、少し高度な会話の中には書物から得た知識が生きている事実を思うと、語学の四能力（読む・話す・聴く・書く）は互いに関連しているはずで、一つの外国語をこなすことは、その外国語を自分の定めた研究のための手段にするということでしょう。つまり、学生は常に言葉の修得と平行して幅広い知識を背景にした学問の方法を身につけなければなりません。

総合科学部はそのための格好の場だと思います。外国語コースの中でも主と副の二か国語を履修し、その他の諸コースの中から自分に興味のある科目を自由に履修できるわけです。従って、学生一人一人が自分の関心に合せて独自の研究分野を決める自由を持つと同時に、指導する語学もまた、総合科学部の諸コースの持っている講義や演習について十分な理解をしておく必要があります。学生にいろいろな授業を受けてそれを身につけなさいと言うだけでは、今の学生は困ってしまうでしょう。学生を指導する方法は厳しくても、肝腎なのは指導する先生が総合科学部の学問の理念を十分に把握し、各コースの授業を外国語コースの中に有機的に生かそうとする姿勢を持つことでしょう。そういう意味では教官も学生も「学ぶ」という同じプロセスの上に立っているという初歩的な気持を忘れてはいけないと思います。

現在ドイツ語を担当している教官には、文学・語学・歴史・芸術を中心に幅広い専門分野と時代的にも深い奥行きを備えた人が揃っています。それぞれがどの分野を最も得意としていようと、外国語コースの発足にあたり、新しく「学ぶ」心構えていることには変りないはずで、（談）

## 「選択」と「総科」の間に

内藤陽哉教授（フランス語講座）

これは必ずしも外国語コースを志望する人に対してだけじゃないんだけど、コースを決めるというのは自分の志望を決めるということですからね。今は、悪い言い方をすると、いわゆる偏差値で輪切りにされてしまって、だいたい入れるようなところに皆入ってくるというようなことが一般的に言われますでしょう。自分がこういう方向に行きたいからとか、自分が主体的に志望するという形ではなくて、だいたいこのレベルなら入れるというんで、僕に言わせれば無茶苦茶な受け方をして、入れたところに入ってくるというような傾向が、全員じゃないけどあるような気がする。だけど決してそうじゃなくて、ひとつ主体的に選択するわけだよ、大学に来るってことは。それまでは、人生の上で主体的な選択というのをしたことがないわけですよ。中学までは義務教育ですし、高校だって普通課程がほとんどですよ。だから自分が人生の中で何かを選びとっていくということをしてないわけ。大学に入る時初めてみんな選んで来る筈なんだ。そこで僕は選択の意識がなければ嘘だと思う。何かを選択するということは何かを捨てるということなんです。人生のいろんな可能性が100ある中で、総科に来れば、それが例えば50に狭まっちゃうわけですね。可能性の中のひとつを選択するということはあとを全て捨てるということなんです。それだけ人生の幅がある意味では狭くなっていく。そういう意識を、今の人たちは割合もってないんじゃない？自分の人生を選びとるんだから大変重要なことなんです。だから、それだけ主体的に、自分はこういうことをやってみたいという、もっと簡単に言えば、自分はこれが好きだということが人生を決めていくんだという気がします。能力なんて後からついてくるものです。私は頭が悪いから出来るかしら、なんて言ってるうちは、まだあんまり好きじゃないんでね。食物なら好きとか嫌いとかはっきり主張するのに、もっと重要な人生の選択のことになると、親の言うこととか世間の言うこととか偏差値とか、そういういろんな雑音が入って来ちゃう。だけど僕はもっと極端に言いたいんだけど、好きなものをどんどん選んでいけよ。あとは雑音だと思えばいい。好きなことが、自分の能力だって引きだすんだ。だから一年生が入ってきたら、パンフレットを渡したり、ガイダンスもすると思うんだけど、その時から1年間かけて、自分のやりた

いものは何かっていうことを主体的につきとめて、やっぱり好きなものをえらんで欲しいですね。

僕はここに8年いますけど、いわゆる総合科学部が出来てから来た人間なんです。それ以外に、教養部時代からいらした先生がいて、その先生が総合科学部を創り、そしてこれから外国語コースがその中に出て、という制度の改革をやってきてるわけ。だから当然大学院と結びつけた形で新しい構想ができてくると思うんですけど、総合科学部はこれまでの学部と違って、未来へ向けて柔軟に対応できる学部だと思います。制度というのは、新しい研究や開発から常に一歩二歩遅れています。特に国立というのは、なかなか政府が私立のように反応してくれなくて、新しい制度っていうのはでき難いわけですよ。でも総合科学部自体の中には自己変革的な気運があるし、それだけの能力も順応する体制も整っていると僕は見えています。だから、外国語コースっていうのを、単にここだけとりあげるんじゃなくて、「総合科学部の中に」外国語コースがあるという点が重要なんでしょうね。外国語コースの学生にしても、外国語コースを中心として、他のどこのコースの専門と結びついて自分の勉強なり研究なりを進めていくかによって色分けができてくる。こういうコースのあり方っていうのが他の学部なり外語大なりでは考えられないわけでしょう。総合科学部の中での外国語コースというところに力点を置いて言えば、他コースと手が組めるということが一つの大きな利点となるでしょう。(談)

### 語学だけでなく、文化・歴史も学べ

檜山久雄教授(中国語講座)

中国語は今後のコースの中では、副専攻として発足するので、英・独・仏語を専攻した学生がその傍らもう一つの語学として中国語をとるわけです。その点、多少矛盾があります。というのは、英・独・仏語はヨーロッパ系の言語ですから、そのヨーロッパ系の言語を主専攻とする学生が全く言語構造の違うアジア系の言語を同時にとるだろうか、ということです。しかし、今のところ専任のスタッフが少なく、とても主専攻として開講できるだけの余裕がありません。当分は矛盾をかかえたまま副専攻としていさざるを得ないのが現状です。

今年度からスタッフが一人増えて三人になります。中国語は一般教育の学生が年々増えて、今延べで千

人超えちゃってるんじゃないかな。それを専任スタッフ二人と非常勤務講師でまかなってきたわけで、それだけで手一杯だった。今年度からは三人になるので、一般教育のほうももう少し精力を注げるし、副専攻のほうにもある程度手がまわせるという余裕はできたんですけどね。だからといって、中国語をやりたいという学生が来た場合、どこまで能力を高められるかという、満足いくようにはできないと思うんです。語学というのは、ただ語学だけやればいいというんじゃなくて、その背景になっている文化・歴史というものもある程度は知らなくてはね。それが外国語コースの中国語だけではそこまでいかないわけです。

ただ、そういう学生がもし来た場合には、僕らとしては単にコースで開く授業以外に面倒は見たいと思っています。数はそう多くはないだろうから、個人的にだって指導できるしね。そういう形でやってあげたいという気持ちはあるんです。特に最近、この広島辺りでも企業なんかから、中国語のできる人という要望もぼつぼつ出てきているし。広島県は四川省と友好提携を結んでいます、向こうから人が来ても通訳する人がいなくて、県庁や市役所でも困ってるんです。広島の地場産業でも中国へ進出しようという希望を持っているところもあるらしいし、そういう意味でも中国語を話したり聞いたりできる学生を育てられれば、就職の面でも希望があるんじゃないかと思いますので、副専攻の段階でも、そういう希望にはできるだけ沿いたたいと思っています。

それから、さっきも言ったように、中国語をやりたいという人がいたら、中国語だけでなく、中国の文化、歴史、そういうものにも一年のときから興味を持って勉強してほしい。これは学校の勉強には限らないわけで、自分でどどん本を読んで勉強すればいいんだから。そういう文化的な背景と現代中国語とを密接に結びつけて欲しいんだよね。ただ語学だけエキスパートになればいいっていうんじゃないで、やる以上は中国そのものを知って欲しいし、そういう勉強を自分でして欲しい。僕は自分の歩いてきた経験として学生にそう要望したいね。そしてこれはどうしたらいいか、ということがあれば、一年のときから、どどん僕のところへ来てくれたらいいよ。(談)

## 「語学バカ」じゃいかん

米重文樹助教授(ロシア語講座)

主専攻という形であればいろいろ言うこともあるんですけど、仮に主専攻で学生が来るとすればですね、外国語コースというのは実用語学を看板にスタートするわけですから、そうすると当該国、例えばロシア語ならソ連、フランス語ならフランスという国を考えた場合、地域文化コースというのもありますけれども、地域文化の観点からの研究とは少し別に、実用語学及びその国という形でいろいろ勉強してみることが必要と思われまいます。それに、外国語を今の時代にやって、例えば大学の中の授業だけでいいというものでは絶対ない。しかも大学には休みが多い。やっぱりフランスでフランス語の研修みたいなのができれば、できるだけ行かせるようにし、あるいはどこかと提携して連れて行くとかいうことを本当は考えなきゃいけないと思うんです。もちろんこれは負担が関係する問題ですから無理には言えませんが、ただ、そういう方向と開いた目を持つようにしないと世界が狭くなってしまいます。やっていることが、何しろ外国のことですから。やっぱり大学の枠だけで考えないように教官の方もいろいろ努力しなければと思います。仮にロシア語が主専攻にでもなれば、私なら、親に借りれる人は卒業後のボーナス一年分を担保に金借りさせてでも、3年生になったら夏休み一ヶ月くらいモスクワのゼミに送りこみます。そうしないと活力が出ません。実際、外国語の勉強で一ヶ月も二ヶ月も休みがあるというのは致命的な問題で、一般の勉強の場合は自分で本読んだりする機会になっていいんだけど、外国語だと完全に一ヶ月離れてしまうっていうのはどうもね。街の中でぶつぶつロシア語の格変化やっても、これはもたないですよ。

外国語コースの構想の前はかなり長い間言語文化コースという構想があったんですが、いろんな事情でうまくいかなかったんです。しかし、それをいい意味に考えて、語学以外にもいろいろ勉強してみる、これをやらないと、実際世の中に出た場合に「語学バカ」になるおそれがあります。「語学バカ」はいかん、それも中途半端にできる「語学バカ」じゃどうしようもない。それなら会社に入ってから、会社がやらせても、やる奴はやりますから。例えば今度ソビエト・東欧方面でもやってくれというような人間には、会社が金出して、夜間講座にでも行かせて研修させるとか。基盤になる頭さえあれば、その時

は仕事上の必要に迫られてますから、これは必死でやります。だから単に語学ができるだけなら会社にいる人間にやらせたっていいわけです。いやしくも総合大学なんですから、他の勉強をして、裾野の広さも必要です。「語学バカ」にならんようにしなきゃいかんし、しかし中途半端もいかんし、難しいですね。いい意味での「語学バカ」ならいいけれども、それはなかなかですから。

副専攻というのは、単位の上から見ても第二外国語に毛のはえたようなものです。なにしろ、一般の語学にプラス4単位、つまり週2回一年ほど余分にやるだけで、これは他学部の人がロシア語を第1外国語にした場合とほとんど同じといってよいでしょう。第1外国語でとった人の場合、小説とか新聞をなんとか辞書ひきながら読むことまではできているわけで、やはりそれ以外に例えば会話の能力とか少しでも将来の基礎となる力をつけるよう、必要単位以上にどんどんやってもらいたい、それが抱負と言えれば抱負です。(談)

(文責 向山 敦子)

## 4) 新発足の社会科学研究所 (博士課程)

— 新しいコスモロジーの工房 —

社会文化コース教授 山田 浩

今春から広島大学に、待望の社会科学研究所が設置されることになった。広大に社会科学系の博士課程をというのが長い間の念願であり、この発足を関係者ともども喜びたい。この設置は、旧制帝大系以外の国立大学でははじめてのケースで、その点で注目されただけではなく、内容的にも国際社会論専攻のユニークさで大方の関心を集めている。

### ただ感慨無量 — 創設までの経過

この構想の源流は、昭和44年5月広大改革委員会の設置にはじまるが、その具体化は昭和54年10月23日新しい大学院構想について広大と文部省とが合意した、いわゆる「10.23文書」の発表以後であった。その後私は一貫してこの問題に付き合っており、創設に当たっての私の感想はただ「感慨無量」の一語につきる。

「10.23文書」の内容は、何よりもまず学部の上に大学院を積み上げる、いわゆる「エントツ型」ではなく、人文・社会科学系学部の壁を低くし、各部がそれぞれ相互に乗り入れる新しい型の大学院の創設にあった。しかし、構想が抽象的段階のうちはともあれ、身体的なプランづくりになると、直ちに多くの困難に直面した。その一つは、法学部、経済学部、総合科学部の社会科学系をいかに入り組ませ、いかなる名称のどのような研究科にするかであった。全体を三専攻からなる社会科学研究所とし、法律学専攻と経済学専攻にはある程度定まった型があるので、そこに総合科学部から若干参加してもらおうというところまでは、比較的簡単に話がついた。難航したのは総合科学部を中心とする第三専攻でその内容をどうするか、そこに法・経両学部からどの程度、また具体的に誰を参加させるかが大問題になった。いろいろ紆余曲折ののち、専攻名は国際社会論、これに経済学部からごく少数、法学部からは政治学科と社会学科の全メンバーが協力することで、やっと一件落着した。

### 痛み分けの結末か？

これよりさらに困難を極めたのは、文学部とのかかわりであった。「10.23文書」には、「文学研究所に総合科学部の人文系を基礎とした学術博士を授

与する専攻を設ける」とあるが、文学部はこれまでの小講座制にもとづく研究体制の根本を維持したい、文学部教授会は「10.23文書」を審議決定しておらず、その文書の成立過程には学部自治の観点が必要な疑義があるなどの理由で、これに頑強に反対した。文部省は、「10.23文書」は広大側が申し出たものなのだとその実行を求め、そのため広大としては、昭和55年以後学内の調整がつかないまま、大学院構想に関する概算要求を断念することを余儀なくされた。

しかし昭和60年に入って、文学部の態度に若干軟化の傾向がでてきたことと、文部省による「10.23文書」の解釈にも変化がみられたことで、事態は構想の実現に向けて動きだした。その背景には、文学部に大幅な方針の転換は望めないこと、またそれ以上に法学部、経済学部、総合科学部には早くからいわゆる「ドクター予算」を配分しており、にもかかわらず博士過程の設置がさらに延びれば、財政硬直化の折から予算支出上の疑惑も深まる、といった文部省側の判断もあったのではないか。

こうして事態は好転しはじめたが、一方で総合科学部の人文科学系教官をたとえ少数にし、新専攻設置というかたちでは文学研究所に受け入れないという文学部の態度は不動だったわけで、この問題がいぜん未解決のまま残った。要するに、従来の地域研究領域およびその担当教官の処遇をどうするかの問題で、解決しようとするれば社会科学研究所のなかに、できるだけ多く吸収するほかに方法はない。もちろんその成案づくりの過程で、明確な社会科学的性格の維持を望む法学部、経済学部の反発は相当なものがあった。国際社会論専攻は「雑炊」だが、人文系をふやせばますますひどくなるといった、ある教官の言を引用するだけで十分だろう。しかし、それはともすれ、博士過程の設置が先決との共通認識が、何とか問題解決に漕ぎつける鍵となった。

### 新しい教育・研究体制への展望

社会科学研究所は、法学部、経済学部、総合科学部(平和科学研究センター)、大学教育研究センターを基盤とした新しい型の研究科である。研究科は法

律学、経済学、国際社会論の三専攻からなるが、総合科学部にもっとも深い関係があるのは国際社会論なので、以下この専攻の内容について多少の説明と感想を述べてみたい。

国際社会論専攻は、あくまで現在各学部在籍する教官を前提とし、しかも長期かつ複雑なプロセスをへて成立したもので、まえもって策定された構想にもとづき、新しいキャンパスに自由に絵を書いたというものではない。したがって、一見雑然とした寄せ集めの印象は否めないが、仔細に検討すればその教育体制に、一定の枠組みと新味を見いだすことは容易であろう。その一つは、この専攻が国際関係、比較社会、地域社会の三つの研究分野からなり、今日の国際社会の直面する諸現象を政治、経済、社会、文化（思想）などの領域について、個別のおよび総合的に解明することをめざしている点である。

いま一つは、前述のこととも関連をもつが、この専攻が社会科学の新しい動向をふまえながら構想され、場合によってはその先取りを志向しようとしている点である。たとえば、従来の旧帝大系大学院では、法学研究科内におかれていた政治学を、また文学研究科のなかにあった社会学を国際社会論専攻の重要な構成部分とし、それらを現時点からみてより適切な隣接社会科学群のなかに位置づけたこと。また現状の政治・社会現象を考察するに当り、その基底を左右する思想や宗教などの諸要因とのかかわりを強調しようとしていること。地域研究の領域では、国際社会の一般的な考察との相関関係のもとで、それを狭い特殊な研究にとどめないような配慮もなされている。

国際社会論専攻はまた、学内研究センターの機能をその教育・研究体制内に組み込んだ点でも、最近の大学院組織の新しい動向に沿うものであった。大学教育研究センターの参加によって、比較大学制度という観点からする比較社会分析の深まりが期待されている。平和科学研究センターの場合も同様で、本専攻のなかに平和学の本格的な研究者養成の場を設定した意義は大きい。社会文化コースが専門科目として平和学をおいてきたことは、これまでも関係者の間で注目されてきたが、このたびの措置でその評価は決定的となった。元国際政治学会・日本平和学学会で、現在日本学術会議平和研究連絡委員長川田侃氏（上智大学）も、私にその経緯や内容についての説明を求め、心からなる期待と祝意の表明があった。

いま一つ新しい学問領域として、比較社会研究のなかに設けられた技術論がある。この分野の教育・研究としては東工大が一般に知られてきたが、大学院組織のなかでの正式な位置づけはなされていないと聞いている。今後各大学で技術論（技術史）を導入する傾向がよまっている折から、本研究科におけるこの面での教育・研究が着実に発展するよう願ってやまない。

#### 今後の課題 — 院生の就職など

国際社会論専攻の特徴は、一言でいえば学問研究における国際性と総合（比較）性の強調にある。それだけに内容的には雑多でまとまりがないようにみえるが、うまく運用すれば人文・社会科学における新しい地平を拓くことも可能となろう。その際重要なことは、各教育科目内の担当教官相互間、各教育科目をこえた担当教官相互の接触と協力をいかにして確保するか、そのための研究上のプランづくりをいかにするかである。多様な柱はそれだけで自然に総合されるものではなく、放置すれば分散固定化になりやすいことは、総合科学部の教育・研究でも痛感されてきたわけで、この点国際社会論専攻でもやはり心すべきことだといわなければならない。

そのほか、今後の重要問題として院生の就職がある。人文・社会科学の場合、院生の就職は自然科学に比べて限られており、しかも新設の大学院となれば、その可能性はいっそう厳しい。先日ある学生がやってきて、新研究科についていろいろ質問したが、そのなかに就職はどうなるのでしょうかというのがあった。痛い質問で返事に困ったが、およそ次のように答えておいた。少しはぐらかし気味のところもあるが、私としては率直な気持ちを述べたつもりだ。

確かに就職条件は厳しく担当教官として努力する必要があるのはもちろんだ。しかし、大学側にだけ求めるのではなく、院生側にも考え、覚悟してもらいたい点がある。とくに国際社会論専攻では、ただ専攻内の教育・研究で小さく固まるのではなく、あらゆる機会を利用して外国で研究し、また帰って勉強するといったスタイルが望ましい。学会で積極的に発表し、質問されたりして、実力を培うとともに、名前を覚えられる努力もしてほしい。要するに、研究上のヴェイタリティということだが、近頃は有名な既設大学院修了者でなくても、実力さえあれば従来は考えられなかったポストにつくといったケースも多くなった。加えて、これからの院生にとって有利な条件もある。たとえば、近頃各大学で国際関係

学部のような学部を設けようとする気運がつよまっていること、また戦後新制大学の発足で増えた教官が、そろそろ定年を迎える時期になっており、し

ばらくすれば大学教官の民族大移動がはじまるであろうこと — 以上が私の返答の大意であった。

## 5) インタビュー

# 社会科学研究所 — 地域研究について —

## ヨーロッパ研究 佐竹 明教授に聞く

新しく新設される「社会科学研究所」は、「法学専攻」、「経済学専攻」、「国際社会論専攻」の三つの専攻にわかれる。総合科学部は、特にこの「国際社会論専攻」の中心になっているわけだが、その中でも、ここに地域文化コースが関わっているのが目にとまる。今回、その辺のところを、この大学院の地域文化コース側の代表として、関わっていらっしゃる佐竹教授にうかがった。

— 4月から設置される社会科学研究所に、人文系統の地域文化コースが関わっているのはどういう学問的及び社会的要請からきているのですか？  
図現在の社会現象を考える場合、狭い意味での社会科学的視点で接近するという事は、当然な事なればなりませんが、それで十分ではないという認識があるわけです。つまりそこに、文化の問題や思想、宗教等が加味されていなければならないということです。例えば、世界のどこかで衝突が起きたとすると、そこには、言語や宗教の問題を要因として含んでいる場合が少なくない。そういった問題に対抗するには、単に政治・経済・法律だけでは不十分なわけです。

— そういった研究の学際化はどのようにカリキュラムに具体化されているのですか？  
図これは、あらゆる専攻に共通しているのですが、まず、前期（修士）課程においては、単位取得を専攻外でもやってもらうということ。それから、専攻内で、それぞれ異なる専門分野の教官が複数集まって行われる「共同ゼミ」を設けたり、三専攻にわたった教官による「総合ゼミ」といったものが設けられること。さらには、論文指導にあたって複数教官の参加も可能になる、といった様に、柔軟なシステムになっているわけです。

— 地域文化コースにとって、新しい大学院と従来の大学院の決定的な違いとは何でしょう。  
図まず1つは、後期課程、すなわち博士課程が設置される、ということでしょうね。それから、決定的かどうかわかりませんが、社会文化系統の科目が組みこまれます。例えば、アジア研究については「アジア政治論」、「アジア社会論」という形で、社会

文化系統の科目が入りますし、ヨーロッパ研究にも「ヨーロッパ政治思想史」、「ソビエト社会経済史」という形で社会文化系統の科目が組まれています。また、アメリカ研究には経済学部教官の担当する科目もあります。つまり、社会科学的な側面が従来よりは強調されています。また、いままでだと三つの系統、すなわち日本・アジア、ヨーロッパ・アメリカ、比較社会・比較文化の三つに、分れていたのですが、今後の研究科ではそういった分類がなくなります。つまり、日本研究が専門でありながらアジア研究の単位も同様にとらねばならない、ということがなくなって、自分の専門に重点を置くことができ、一方で前よりも、多方面に、そして自由に研究することが可能になっています。

— 入ってくる学生に望まれる姿勢、知的バックグラウンドというものはありますか？  
図学際的研究に対する意欲をもった学生が望まれると思います。何か1つを専門的、集中的、そして徹底的に研究したい学生には一寸合わないかもしれませんが。それから、国際社会論専攻においては国際的素養ということで、語学力が要求されてくると思います。

— 5年修了後の進路は、研究者をはじめとして、国際舞台、または国際的素養が求められる方面ということですか。  
図それを目指しているということですね。あとは学生諸君の努力しただけだと思います。

— ありがとうございました。

(文責 吉田 雄一郎)

## 6) 2年目を迎えた生物圏科学研究科

編集部

生物圏科学研究科が新設されて一年になる。第一期生（博士課程前期・後期）の大学院生が誕生したわけだが、編集部では2人の大学院生にインタビューを行い、この一年間をふり返っての感想などを聞いてみた。

「僕より学年が上の院生がこの研究室にいないということもあって、研究に関してすべて一から自分でやっていかなければならないので大変でした。」と、この一年間の感想を述べてくれたのは堀越研究室の立石貴浩さん（博士課程前期一年生）だ。



鳥取大学農学部農芸化学科卒業。ここでキノコ関係の化学分類といったことをやっていたそう。生物圏科学研究科へ入って、山火事跡地での微生物のバイオマスの動態に関する研究を行っている。

「鳥取大学にいたときは主に室内実験だったんですが、こっちに来てからは、フィールドワークと室内での分析実験が半分ずつくらいになり、かなり生態学的な色彩を帯びてきています。もともと化学的なバックグラウンドでやってきたものですから、研究を始めたときにはちょっととまどいましたね。今この堀越研には僕しかいないのでいろいろ大変なことも多いんです。しかし総科というところは非常に開放的な面をもっており、院生にしてもいろんな分野の人が集まっているので、そういう人達とディスカッションすることによって、幅広い見方ができ、非常に勉強になります。」

高橋研究室の日鷹一雅さんは博士課程後期の第一期生。東京農工大農学部修士課程修了。自然農法とか有機農法という、農薬や化学肥料を使わない農法で生産性をあげている農耕地で、生物群集などを調べる研究をしている。日鷹さんはここでの印象をこんなふうに述べている。（写真右）

「古くからドクターコースのある大学だと、ひと



つの研究室で大学院生や卒論生など学生の層が厚いのでからね、ディスカッションする機会が大変多いようです。まだあまり総科では活発にディスカッションすることが根づいていないという印象を受けました。そんなことでこの研究室でも、そういった気風が育つように、輪読会やゼミなどを始めたりしました。徐々に雰囲気は盛り上がってきましたが、まだまだこれから、という気もします。それから、研究者をめざそうという人はかなりのプロ意識みたいなものを持っていると思いますが、こういったものを育ててゆくような環境にすることもこれからの課題なんじゃないでしょうか。」

生物圏科学研究科はこれから総合科学部にどんなことをもたらしてゆくのであろうか。堀越教官は次のように述べておられる。

「まず何よりも研究のレベルが大きく上がるということでしょう。教官だけだったらできないようなことでも、大学院生とともにやってゆけばより深く研究をすすめることが可能となります。ドクターコースができて研究室の活性化がさらに進むでしょう。教育面を考えても院生の層が厚くなることで、セミナー等の活動が盛んになったり、いろんな技術や知識を院生から教えてもらうなど、学部生にとっても大きな刺激となることは間違いありません。」

最初の「学術博士」は2年後に誕生する。産声を上げたばかりのこの研究科が「熟成」するためには、これからの大切なのだという感じをうけた。

（文責 海堀 修）

## 7) 大学院工学研究科情報工学専攻の新設・発足について

### 編 集 部

今年4月より広島大学大学院工学研究科に情報工学専攻が新設・発足する予定です。この専攻は工学研究科の情報工学関係の教官と在来の環境科学研究科の情報処理・数理情報関係の教官の参加によって組織され、この専攻の開設により総合科学部では数理情報学等を専攻する学生に博士課程の大学院への道が開かれることとなります。

高度情報化社会といわれる昨今、情報科学分野の人材養成が強く求められており、この情報工学専攻はこういった社会の養成に支え得る組織として注目を集めそうです。そこで編集部では、この専攻の新設準備を総合科学部側で中心的に進めてこられた磯道教官にこの情報工学専攻についてインタビューを行いました。

— この情報工学専攻が発足するまでの歩みをお話していただけませんか？

総合科学部ができたのと同じ頃だったと思います。広島大学では全学に博士課程の大学院を作ろうという気運が高まっていました。ところが従来までの学部と直結型のものではない、新しい構想の大学院を作る必要があったため、総合科学部では理科系の生物圏科学研究科が生物生産学部との協力でできましたし、文科系では社会科学研究科が、法学部や経済学部と協力して今春できることになったわけです。

我々の場合、もともと理学部、工学部、総合科学部から同じくらいの距離のところのひとつ新しい研究科を作ろうという構想があったのです。しかしこれは実現せず、この情報工学専攻は、総合科学部と工学部とが協力して既存の工学研究科の中に一専攻という形で実現したものです。「研究科」を「学部」のようなものと考えれば、「専攻」というのはその中の「学科」のようなものです。

なお、この専攻の担当教官は総合科学部側から半分、工学部側からも半分というような構想をとっています。

— 工学部と総合科学部は現在距離的に結構離れています。このことでいろいろ問題が生じるようなことはありませんか？

この4月からスタートする情報工学専攻のカリキュラムでは、最低でも1科目は工学部の方で講義を受けないと卒業単位に満たないということになっているので、たぶん週に2科目くらいは受けに行かざるを得ないでしょう。そういった点の時間的なロスは

あると思います。うら道を車で飛ばしていく人ならともかく列車を利用して行けば往復3時間くらいは見ておかないといけませんからね。運賃なんかにしてもバカになりませんし、総合科学部が移転するまでの期間は学生は大変だろうと思います。初年度はこのままでスタートしますが、今後、理学部の授業のあるものを受けることによって振替出来るようにするか、総合科学部での授業を移転までの期間だけでも増やすなどという便宜を図る努力をしてゆきたいと思っています。

— この情報工学専攻でどんな学生を育ててゆきたいと考えますか？先生の御意見をお聞かせください。

もともとは「情報科学」というようなひとつの専攻を作ろうとしたわけで、いわゆる工学だけの専門学生を養成するつもりはありません。つまりもう少し幅の広い視野をもった学生を育てたいと思っています。僕自身の希望をいえば、必ずしも理科系にこだわらずに、例えば経済のようなものとか、社会システムのような方面のものを扱おうとする学生などが出てきたらいいと思っています。そこまできなくとも、相当に総合的な、情報科学という名に恥じないような学生がいてほしいし、また育てていきたいと考えています。

— ありがとうございます。

なお、この工学研究科情報工学専攻については総合科学部では学務第一係を通じて知ることができません。

(文責 海堀 修)

## 8) 女子学生 — 総科のひとつの体現

編 集 部

総科60生 130人、うち女子は58人。約半数である。学教や文学部を考えれば、とりたてて騒ぐほどのことでないような気もする。61生がどのような男女比になるのか現時点においては知る術もないが（2月上旬、二次出願の締切もまだという頃の話なのである、これは。）60生以外の方々の中には、60生と上級生とを比較して「総科はそのまま女子学生数が増え続け学部性格が変わってしまうのではないか」と危惧する向きもあるらしい。総科ははたして近い将来、女子が大部分を占める学部になるのか。いや、それよりも総科の中で女子学生とはどういう存在なのだろうか。60生を中心に、かなりの私見の混ざることを覚悟しつつ考えてみようと思う。

### 1) 数字にみる女子総科生

まず下の表を見て頂きたい。

これまで60生になっていきなり女子学生数が増加したように思っていたが、過去にも一度、54生で女子が40%を超えている。学部創設時の49年度はおいとくとして、それ以外はだいたい2割強から3割弱の線で動いているだけである。なぜ54年度と60年度に女子が増加したのか？ 54年度……すでにお気づきの方もいらっしゃるかと思う。昭和54年というのは、「共通第一次学力試験」がはじまった年である。が、しかしその次の年からはまたもとに戻っているので共通一次と総科の女子数に直接の関係

を見出すというわけにはいかない。（当時の入試科目や倍率がともなわれればある程度推測できるかもしれない。暇な方はどうぞ）60年度の場合は「文学部数学起因説」が有力か。つまり文学部を目指していたコが二次試験に数学が加わったためやむなく総科に来た、という考え方である。しかしこれも実際に回りを見た場合首を傾げざるを得ない。もともと文学志望ならおそらく地域文化コースあたりを志望すると思うが、そういう感じの地域志望の女性は60生を特徴づけることができるほどに多くない。

もしかしたら、なぜ女子学生数が増えたかなどということを考えるのは意味のないことなのかもしれ

### — 総科における女子学生とそのコース

表-1 全学生数に対する女子の割合

入 学 年 度	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
学 生 数	78	101	123	110	122	123	123	119	126	123	122	130
女 子 数	13	39	36	38	36	50	36	42	31	37	38	58
女子の割合(%)	16.7	38.6	29.3	34.5	29.5	40.7	29.3	35.3	24.6	30.1	31.1	44.6

表-2 コース別女子数

		49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
地 域	男	14	15	22	14	25	15	26	16	22	19	17	
	女	7	24	21	15	13	27	14	19	13	17	21	
社 文	男	21	17	26	22	19	22	19	22	30	26	20	
	女	1	5	2	6	7	8	9	6	3	4	6	
情 報	男	16	11	20	12	23	12	20	20	15	15	20	
	女	5	5	8	14	16	12	11	12	15	15	7	
環 境	男	14	19	18	24	19	24	22	19	28	25	27	
	女	0	5	5	3	0	3	2	5	0	1	4	

ない。たまたま入試制度の変革があり、それによって多少女子の志望者数が増加し結果として学部占める女子の割合が増加したが、「ただそれだけ」といえないだろうか。いろんな偶然が重なっただけで総科に今後女子が増え続けなければならない必然性はどこにも見当たらない、と私は考えるのだからいかなものであろう。(61生の女子の割合によってまた違った見解が生まれるであろうと思うのだが)

## 2) 60生女子の意識

この記事を書くにあたって60生の女子のみなさんに簡単なアンケートをとらせてもらった。その結果をもとに少し話を進めてみたい。

①あなたはなぜ総科を選んだのですか?

この質問に対する選択肢は5つ(その他を含む)。一応挙げてみると。

- a. 進みたいコースがあったから
- b. 大学で何をしてもよいか分からなかったから
- c. いろんなことが(学際的に)やれるから
- d. 当時の成績で(本当は他学部志望)
- e. その他

である。複数解答であった。a, cは積極的志望動機であり、b, dは消極的それである。おそらくそうなるのではないかと予想したとおり、a, cがかなり多かった。dのやむにやまれずという人も最後の「今、総科をどう思っていますか?」の問いかけに、来てよかったと答えている。ごくごく簡単なアンケートであったため、学問的な方面や対人関係云々に関する意識を細かく探るには至っていないが、来たかった人も、そうでなかった人も総科に来てひどく期待を裏切られ後悔している様子は見られなかった。

②現在の志望コースはどこですか?

③志望コースをかえたことがありますか?

②のほうはともかく(この『飛翔』がお手元に届く頃には60生のコースもそれぞれ決まっているはずである。)③では総科らしさを垣間見たような気がした。①の答えとは全くが関係ないのである。たとえば、進みたいコースがあって総科に来たが今は入学当時とは違うコースを志望しているというのは珍しくもない、ごく普通感覚なのである。文系で入試を受け文系(この場合便宜上、地域・社文を目指す)コースを“文系”、“理系”として区別することの是非はここでは問わない)のコースに進むつもりだったが別のものに興味が移って……数学だの化学だの生物だのをがんばって理系のコースへ、

などというのは「やっぱり」ありふれたことなのだ。なかなか大変ではあるらしいが。同じ様に理→文も起こる。本当に人それぞれである。1年間の猶予期間は、過たず「総合科学部」の学生を造っていく。これが総科の学生だ、と定義づけられるものがあるというのではない。強いて言えば、みんないっしょくたにひっくるめられないところが総科らしさか。

女子学生の話に戻ろう。

## 3) 総科の一女子学生として

ずいぶん脈絡のないことを書き連ねてしまったようである。もともとは「総科は女子大になりうるか!?’というテーマを与えられたのだが――

総科の“女子”学生であること。

総科の女子“学生”であること。

そして

総科の“女子学生”であること。

大学での学問を考えた場合、現在の日本では女性のほうがより自由であるのではないかと考えることがある。男性の場合、あいもかわらず「家族を養って行く」ためにきちんと職業を持たねばならないそうで、大学がどこかしら手段と化してしまったりもする。(ことが多い?)

また、別に男だからとか女だからとかいうことにこだわらなくてもいいのだけれど、様々なものを入れようとするとき、どちらかといえば女性のほうがその方法にせよキャパシティにせよ上をいくのではなからうかと思ってみたりもする。非常に乱暴な飛躍で自分でも恥ずかしいのだが、総科という学部(私が思っている、である)は、女性に向いているのかもしれない。59,58,57生 ―もしかしたら60生も―のおねえさまがたには理解に苦しまれるところもあろうかと思われるが、女友達にうじゃうじゃらとりかこまれて日々を送っている者の感覚である。

女子学生(私も含めて)

総科のひとつの体現でありたい。

(文責 藤本 貴子)

## 9) 学生による総科のビジョン

### ある総科生のつぶやき

社会文化コース3年 牧下 圭貴

#### 1. 総科の入り口にて・・・

「60生はいいな、女性が多くていいな。何て、あの半地下の研究室が華やいているのだろう。僕達の頃は、煙草の濃霧によどんでいたのになあ。」

昨年の春の僕のつぶやきである。

何でこうなったのだろうか。

僕の問題意識は、60生への羨望とやっかみという、「問題意識」という言葉を口にだすのもおこがましいような下世話な思考から生まれた。

そういうものだ。

そこで、すでに遠く過ぎ去った「あの頃」をちょっと調べてみた。

下の図を御覧ください。(61生の皆さん、おめでとう。もうこいつには、用がない。)

58, 59年度入試配点

		国	社	数	理	外	論
文	1	200	300	300	300	200	
	2	200	～	～	～	200	200
理	1	300	300	200	200	300	～
	2	～	～	300	300	～	～

1次 1300点, 2次 600点

60, 61年度

		国	社	数	理	外	論
文	1	150	150	100	100	100	～
	2	～	～	～	～	250	250
理	1	100	100	100	100	200	～
	2	～	～	250	250	～	～

1次 600点, 2次 500点

58, 59年度の方は、明らかに1次重視である。そして、60, 61年度は1次2次がほぼ等しい。

ふむ、傾向が変わったな。どういう意図で変えたのかはわからないが、まあよい、昨今は共通1次の弊害が云われていることだし、これならば2次逆転の可能性もあろうというものだ。

ところで、話は変わるが、僕は今、社会文化コースにいる。けれども、入試は理系で受けた。よくある話だ。実際、僕は前の配点に助けられたのだ。何故ならば、僕は、2次は理系で受けたかったけれど、社会系の専門学部にも色目があったからである。その点、58年度の、2次科目以外の科目の1次の配点を上げるというのは、非常に都合が良かったのであった。

自分に都合が良かったので、さすがは総合科学部だなあ、と、一人感心したものであった。

ところが、である。60, 61年度の配点にはそういうポリシーがない、ような気がする。

文科系は、2次科目以外の文科系科目の配点を上げているし、理科系は英語のみを上げている。

これではまるで、文学部と理学部の試験じゃないか。

僕は、別に改革がいけないと言ってるわけではないし、総合科学部は常に変革してほしい。それに、現に、今の入試制度で入った素敵な60, 61生、総合科学部生がいるのである。

ただ、今の配点ではここにいなかったであろう僕は、前の配点もなかなか捨てたもんじゃないんじゃないとつぶやいて、自分のアイデンティティの確保に努めるのである。

62年度から、また、入試制度が変わるようである。願わくば、総合科学部の理想により即した試験がおこなわれんことを・・・

#### 2. ひとりごと

人の愚痴は聞く気がないが、自分の愚痴は人に言いたいので、ここに書くことにした。

あんまり書くと友達なくすので、ここでは1つにしておこう。

上でも書いたが、僕は社会文化コースの人間である。

しかし、理系の専門にもわりと魅力を感じている。御世辞にも真面目な学生とは言えそうにもない僕であるけれど、聴講の時は、さあ頑張ろうと人並みに思っては、いる。

昨年度の聴講受け付けのときのことだった。

僕は、とある理科系の講義が予定されているプレハブの教室に入った。そこには、既に総科の友人達が集まっていた。

入ってきた僕を見て、環境科学コースの一人がいった。

「おまえの、教室はむこうだよ。」

彼が指差した教室は、社会文化コースの講義が予定されているところであった。

僕は、総合科学部総合科学科生であって、社会文化科生ではないし、そうなりたくない。

ところが、現実にはそういう風潮がないといえないような気がする。

教官が、特定の学問領域のエキスパートとして、自分の守備範囲が限られるのは、当たり前としても、学生、しかも総科生までもが、そうする事はあまりおもしろくないような気がする。

どうおもいますか？

### 3. 世界にはばたく・・・

「安芸の国」という唄がある。61生の皆さんは、もう歌いましたか？総科の恥だとおっしゃる方もいらっしゃると思いますが、僕は、学部歌としてふさわしいのではないかと思うくらい好きです。

その最後の一節に、「世界にはばたく総科生」というフレーズがある。うたう時は、このフレーズが、延々と繰り返されるのであるが、果たして総科生は世界にはばたくのか、本題の総科のビジョンについて想像してみたいと思う。

さて、今、総合科学部で一番問題になっているのはなんだろうか。僕が思うには、部屋と一般教育

にあるのではないだろうか。

部屋の問題については、あの約束の地、「西条」に行けばおのずと解消するだろう。そうなれば、今みたいに、一般のために総科の専門が他の学部の教室で行われるなんて事はなくなるのではないだろうか。

問題は、一般教育である。いくら総合科学部が、もともと教養部だったからって、いつまでたってもほとんどの一般教育科目を総合科学部の教官が教えなければならぬなんて事はないのではないか。

今のままでは、総合科学部の教官の負担はもとより、総合科学部生にとっても支障があるだろう。

それではどうすればいいのであろう。

新たに、教養部を作る？

それでは、総合科学部の成立の意味がなくなってしまふ。

それよりも、他の学部の教官も等しく一般教育を行えばいいのである。

総合移転を機会に、そうしたらどうだろうか。

そうすればもっとゆとりができて、研究・学問活動もやりやすくなるであろうに。

ともあれ、総科は、できてからまだ12年しかたっていないのである。システムが硬化するにはまだ早い。

より柔軟に、いつまでも柔軟に、総合科学したいものだ。

明確な“総科のビジョン”は描けなかったが、総合学科を生かすも殺すもそのときに総科に関わる人たち次第であるのは、間違いないようである。

## 総合科学部現代事情

環境科学コース3年 中谷 健二

総合科学部は今、一体どうなっているのだろうか。はたして今の総科が総科のあるべき姿なのだろうか。61年度から外国語コースも設置されるそうだ。総科自体が大きくなるのはいいことだし、人気があるというのも結構なことだ。でも入ってくる学生は、「総科」らしい学生なのだろうか。

総合科学部は、60年度から共通一次の傾斜配点を変更した。それは、文系の数学・理科・外国語重視から、国語・社会重視へ、そして理系の国語・社会・外国語重視から、外国語重視へと、変わったのであ

る。

傾斜配点を何故変えたのか。変える必要があったのか。

この傾斜配点をみてもみると、理系分野の強い文系の学生と、文系分野の強い理系の学生は、いりませんよ、といっているようなものじゃないか。僕が入ってきたときは、理系は、いわゆる文系科目を重視していた。僕は、「ふんふん、総科っていうのは数学、理科だけでできてダメなんだな。全科目できないといけないんだな。さすがにあたらしい学部だけある

や。」と一人で感心していたものだ。

それが、今では文学部・理学部と変らないじゃないか。総科のオリジナリティーは、一体どこにあるんだ。

入試方法が理学部と一緒になら、総科に「思い入れ」を持って入ってくる学生もすくなくなるんだろな。

僕は、総科に思い入れを持って入ってきた。少なくとも、「何をやってる学部なの？」ときかれたとき、「理学部と同じようなことです。」とは、言いたくない。それくらいは、総科に対してこだわっていたい。

でも、理学部と総合科学部を比較してみても、専門分野に関しては、総科はとてまかなわないと思うのだ。

総合科学部環境科学コース化学専攻をくらべてみよう。彼等は、一年のときから実験があり、二年、三年と化学実験を積んで、卒論にとりかかる。一方、こちらは二年の前期に化学基礎実験があり、三年の後期に分析・物理・有機・生・化学実験があるだけである。

向うが三年かかってやっていることを、こっちは一年でやらなきゃいけないのだ。誰がみたってどちらが経験豊富なのかは明らかである。

総科と理学部は全然違う。同じ土俵で比較してみたって、それ自体無意味である。総科に化学だけしか興味がない学生が入ってきても面白くないと思うし、総科はそういう学生を求めてはないはずだ。

また、理系から文系、文系から理系に変わることができるのも、総科の大きな特色である。文系・理系の区別を少なくとも一年のときはつけないし、つけるべきではない。それが、去年からドイツ語に関してはクラス分けを学生番号じゃなくて、文系・理系でやってるのだ。これは明らかに文系・理系の区別化である。

傾斜配点の変更、文系、理系の区別化、この二つのことが意味するのは何か。これは、各コースが次第に学科化されつつある、と私はみる。それも、入学したときから。文系で入ったら文系で、理系で入ったら理系でやりなさいよ、とっているようなものだ。

確かに、教官にとってみれば卒論に入るときに専門知識をより多く持っている学生が欲しいに決まっている。でもそれじゃあ、総科の持ち味ってのは一体どこにあるんだ。

総科の持ち味は、何にでも興味を示し、色んなこ

とを積極的に取り込もうというところにあるのじゃないか。専門知識にとらわれない、幅広い知識、教養を身につけるのが、総科の最初の目的だったのではなからうか。

僕は今の総科が好きだ。特に一年のときのあの浮遊感がいい。どっちつかずの状態は人を不安にさせる。そういう不安定な状態だからこそ、これからのことを真剣に考えることができる。環境に行こうか、情報にしようか、いや、社文も捨てがたい。総科の各コースをお互いに十分知り合うことは、大事なことだ。

それが、今の状況では、そうした選択余地が段々少なくなっているような印象を受ける。

総合科学部ができてやっと十年余り。学部のカラールなんて、あってないようなものである。これからもどんどん変わってゆくだらうし、変らなくして総科の進歩はありえない。しかし、今回のような変わり方は、僕にはどうしても納得できないのだ。今更、理学的・文学部的なものを目指したっておかしいと思うのだ。

そういう方針を目指すなら、いっそのこと、総科だけ五年制にしたらどうか。そうしたら、専門知識だって他の学部に見劣りはしないだろうし、総科の持ち味だって生かせるはずだと思うのだが、どんなもんでしょうねえ。

## 10) 取材を終えて・・・

### 編集 部

『飛翔』No. 25で、我々は総合科学部の10年間をふり返ってみる特集を組んだ。これは、総科が時間の経過とともに創設当時の理念から少しはずれてきたのではないかという疑問をもったことから始めたものだ。取材の結果、学際的な研究及び教育ということでは必ずしも悲観的ではないことがわかった。そして今回の特集では、問題点を含みつつも、発展し続ける総科を垣間見た。

総合科学部に関連する大学院がほぼ勢揃いし、更に外国語コースの開設と、昭和61年度は「新たなる発展」が始まる年である。新設・開設をめざし永年情熱を注いで来られた多くの方々に敬意を表したい。生まれたばかりの大学院やコースの運営はこれからが正念場だと思うが、総合科学部を構成するすべての人々が努力を重ねることで、これらの発展が達成される。

取材前、地域文化コースとの兼ね合いから、「外国語コースは総合科学部の中に存在価値があるのか」などという疑問も出されたが、いろいろ取材して、このコースの特色・理念などを知り、その考えがとりこし苦労であったこともわかった。

今回の取材の中で、嶋屋教官が「肝腎なのは指導する先生が総合科学部の学問の理念を十分に把握し、各コースの授業を外国語コースの中に有機的に生かさそうとする姿勢を持つこと」とおっしゃっている。全くその通りだ。外国語コースの話としてだけでな

く、総合科学部全体として今一度考えてみる必要がある。新設が相次ぎ何かと忙しい時期かと思われるが、「発展」とともに根本から総合科学部を見据える年になれば、と思う。

これは「教える側」だけの問題ではない。学際的な研究ができる環境が整っていたとしても、学生にそういう意識がなければだめだ。自分のコースの専門だけで手が一杯という人が多いのが現状ではあるが、もっと意欲的に他コースのいろんな分野の知識を吸収してもらいたい。「他コースの単位を揃える」というような言い回しは早くなって欲しいものだ。文学をやっている人とコンピュータをやっている人が出会ったとき、文学をやる人がコンピュータのキーボードに触った経験があったり、コンピュータをやる人がヘミングウェイを原書で読んだことがあったりすれば、それだけのことでお互いのコミュニケーションはずっとスムーズになるはずだ。そういう地道な接触が、いろいろな人の共存につながってゆく。

外国語コースが開設されることによって、既存の4コースの学生にとってもさらに視野が開ける。そうでなければならない。「総合科学部は4学科—」というような皮肉った言葉を学生の間でよく耳にする。「5学科」という言葉は聞きたくない。「新たなる発展」期を迎えた総合科学部、「充実」のためにも我々がしなければならぬことは多い。



キ肉マンみたいな